令和３年度　現職研修助成事業研修報告

萩市立三見小中学校

１　研究主題

主体的に学び合う児童生徒の育成
～小・中「つながり」ある授業を生かして～

本校は小中学部合わせて３８名の小規模校である。児童生徒はお互いの良さや持ち味を理解して、安心安全な人間関係や環境の中で折り合いを付けながら学校生活を送っている。

一方、少人数の単学級や複式学級で学んでいるため、学級の人間関係や学習の場面での個々の役割が固定化している傾向がみられる。その環境に甘え、我慢ができなかったり、自分の思いを根拠立てて伝えることが苦手で消極的であったりする。

そこで、児童生徒が粘り強く、主体的に学習に取り組めるように、昨年度から２年間に渡りこの研究主題を設定し追究していくことにした。１年次は、「三見のリーダー学習の型」の共通理解と定着に重点を置き、主に土台作りを行った。２年次は、「学びを深めるための話し合いの在り方」について視点を移しさらに追究していった。

２　研究の内容

本校では、これまでに小中一貫教育のあり方も含めて、教職員が共通した教育観のもと、９年間の連続性のある教育活動を推進してきた。また、小学部で育てた学び方が、中学部で生かしきれていないという課題から昨年度は、「三見のリーダー学習の型」の共通理解と定着に重点を置き、小中９年間で主体的に学び合う児童生徒の育成の土台作りを行った。その結果、中学部でもリーダー学習を取り入れた授業が多く見られるようになり、小・中「つながり」のある授業が展開されるようになってきた。

そこで、今年度は、「型の定着」からさらに、「学びを深めるための話し合いの在り方」について視点を移し、研究を進めていくことと、より深い学びの実現に向けて「共学び(学び合い)」の充実について研究を進め、他人の意見と比較しながら考えて発表する力を身に付けさせ、「思考力」と「表現力」の向上にも取り組んだ。また、より深い学びにつながるよう、発達段階に応じた効果的なＩＣＴの活用についても研究を進めていった。

３　研修視察

①　下関市立宇賀小学校（第50回山口県へき地複式教育研究大会）
　・ホワイトボード、ロイロノートを活用した複式授業

②　都城市立縄瀬小学校（全国へき地教育研究大会宮崎大会　リモート参加）
　・ＩＣＴを活用した学び合いの授業

③　滝上町立濁川小学校（北海道へき地教育研究大会　リモート参加）
　・学び方を身に付け、意欲的に伝え合う授業の展開

④　下関市立勝山中学校（授業力向上実践研究指定校授業研究会）
　・外部指導者を活用し、子どもの意欲を高める授業の展開

⑤　美祢市立厚保中学校（新しい学びプロジェクト公開研究会２０２１全国大会）
・知識構成型ジグソー法を用いた協調学習とＩＣＴを活用した授業
⑥　山口大学教育学部附属山口中学校（授業参観）
・主体的な学び合いの授業

４　公開授業

①　小学部３・４年　算数科（授業者：嶋嵜　敬子）

【３年】

児童が端数部分の数値化の必要性を感じられるように、導入を工夫し、数量をイメージしやすいように、具体的場面や絵、図など視覚的に捉えられる教材を活用した。また、図や数直線などと対応させながら、分かりやすい言葉を使って自分の考えをもつように意識させ、発表の際にも、このことを心掛けることで、それぞれの考え方の共通点や相違点についても気付けるようにした。

【４年】

面積の意味とその単位について理解できるように、単位正方形のいくつ分という考え方をもとに考えをまとめさせるようにした。公式の意味を理解するとともに、公式のよさに気付けるように、いろいろな求積問題に取り組ませ、式と図を対応させながら、分かりやすい言葉を使って自分の考えをもつように意識させた。発表の際にも、それぞれの考え方の共通点や相違点について気付けるように意識させた。また、面積の大きさについての感覚や意味の理解ができるようにするために、児童の身近なものや場所を調べる活動を取り入れた。

②　小学部５・６年　算数科（授業者：三輪　雄一）

【５年】

自分の考えを積極的に発表できるよう、課題をもつ場面で既習事項やヒントを活用し、解決方法の見通しや解答の見当をつけさせるようにした。また、問題場面を捉えることができるように、数量の関係を図にしたり、短い言葉で表したりして示し、テープを使い量感を捉えることができるようにした。さらに、二つの数量の関係を比べる方法を考察できるように、比較する方法を振り返ったり、解答を問題に当てはめたりして確かめる活動を仕組んだ。

【６年】

リーダーを中心に自分たちで学習のめあてをもつことができるように、既習事項と関わらせ、問題との出会わせ方を工夫し、見通しを立てさせた。また、話合いがマンネリ化しないようにそれぞれに考えてから話し合ったり、みんなで一つの考えを書き表したりした。さらに、折れ線グラフ等の学習を想起させ二つの数値をグラフに表すことへの経験を積ませることで、誤答を少なくし、グラフの変化に目を向けることができるようにした。

③　中学部１年　社会科（授業者：小林　哲也）

生徒たち自身の手で思考を深め、新しい視点を獲得することを目標に、進行役の生徒を中心とした学び合い活動を行った。その際、自分たちの力で個々の意見を整理し、さらに考察する場を設定することで、思考を深めることの楽しさや相手を納得させるためには自分の意見の根拠を伝えることが大切であることを実感させた。特に、本単元で扱うアメリカ合衆国は、日本との関わりも深く、生徒にとっても比較的イメージがしやすい国であることから、アメリカ合衆国と日本の文化や社会の仕組み等を比べることを通して、２つの国の共通点や相違点に気づかせ、アメリカ合衆国の特徴を理解させた。

④　中学部３年　理科（授業者：松岡　美鈴）

常に身近にある太陽や月、金星についての学習のため、それらの現象も日々観測できる。そこで、これら天体の現象を視覚的に見せて考えさせることで生徒の興味・関心を高めることをねらいの一つとした。また、本単元は１日や１ヶ月、１年という時間軸で変化する天体の動きについての学習であるが、観察の視点を自転による地球の外へと置き換えて考える内容であるため、生徒にとって理解しにくい。そのためモデル実習や映像、デジタルコンテンツを活用して天体の現象を視覚的にとらえてじっくり考えさせた。

5　成果と課題

昨年度から、山口県へき地・複式教育研究大会に向けて取り組むにあたり、本校の特徴である小中一貫教育をベースに、リーダー学習に視点をあて、児童生徒が主体的に学び合う学習を目指し研究を進めてきた。小学部・中学部が「つながり」のある授業を意識することで、児童生徒の主体性を引き出し、思考力・判断力・表現力の向上にもつながった。また、リーダー学習を根底に、共学びに焦点を絞り、「出し合う」「整理する」「発表する」の３項目に力を入れ指導することで、児童生徒たちは意見を出し合い、他人の意見を受け入れる姿勢ができてきた。さらに、小中が一緒に研修を進めめざす子ども像を持つことにより、小学部・中学部の壁がなくなり、研修だけでなく行事や学校運営においても効果的な「つながり」ができ成果が上がった、

その反面、協働的な学びに重点を置いたため、タブレットが導入されたものの、適当な、有効的な活用については課題が残った。今後は、検索、動画撮影以外にどのように活用できるかを研修していく必要がある。

6　おわりに

今回、現職研修助成事業を活用させていただくことで、コロナ禍においも、多くの教員が先進校の研究大会等に参加（リモート参加も含む）することができ、教員の資質向上に大いに役に立った。また、小中の「つながり」を意識して研修を進めてきたことで、小中一貫教育校だからこそできる研究や他校への提案を行うことができた。今後も小中の教職員が同じ方向を向いて子供の成長を見守っていくとともに、タブレットの有効活用についてしっかり研修を進めていきたい。